

東日本大震災は、人間と自然の関係、または人間の知や技術についての認識を大きく変える契機になった。いうまでもなくその象徴的な出来事が、福島第一原子力発電所の事故で、事態は今も収束していない。文字やメディアを支えている何か<sup>①</sup>も大きく変わってしまったように感じられる。

二〇〇九年のフィンランドのドキュメンタリー映画「100,000年後の安全」(原題: Into Enemy, マイケル・マドセン監督、デンマーク・スウェーデン・イタリア)は、放射性廃棄物の問題をテーマにしているが、人間のコミュニケーションの「条件」ともいえるべき問題にも触れている。

原子力発電や核物質を扱う過程で、放射性廃棄物が産み出される。これらの物質が主体にとって無害になるには長い年月がかかるが、どのような方法でその時間を待つか、この問題を最終的に解決した国はまだない。フィンランドは、高レベルの放射性廃棄物を永久に貯蔵する世界初の地下施設の建設を始めている。この施設は「オンカロ」(フィンランド語で「隠された場所」の意味)と呼ばれ、ヘルシンキから西へ二四〇キロの島、オルキルオトという場所に存在する。地下五〇〇メートルに穿たれた広大な空間に、封印した物質を埋めようとする計画だが、施設が完成するのは百年後の二十二世紀になるといふ。映画はこ

の施設の映像や関係者のインタビューなどで構成されている。

施設が完成した後には、地上の入口も完全に封鎖されることになっていて、そこで廃棄物の十万年間の半減期を待つことになるのだが、十万年とは人間にとってどのような時間だろうか。人間(ホモ・サピエンス)が現れたとされるのは約二十五万年前で、人間にとって十万年というのはほとんど未知の時間である。ここに大きな問題が存在する。

その間に後世の人間が何かを隠されていることに気づいて、掘り返してしまったら？

「ここは危険な場所だから、近づいてはいけない」というメッセージを未来の人間に伝える必要がある<sup>\*1</sup>。

ところが数万年後に人間が生き残っていたとして、彼らが文字を使ってコミュニケーションをするかどうかなど、まったく保証はない。人類最古とされるシュメールの楔形文字ですら五千年前、最古の漢字である甲骨文も三千五百年前のものにすぎない。文字が読めなければ、もし読めたとしても未来の人間は「近寄るな」というメッセージを無視してしまうかもしれない。石碑のようなものに、文字または絵文字や絵画によるメッセージを刻むことなどが検討されているが、まだ結論は出ていない。

文字も書も私たちが考えているほど、長い長い時間には耐えられないのかもしれない。



① オンカロ施設のメッセージのアイディア。日本語版映画チラシより。福島原発の事故を受けて、映画は二〇一一年六月急きょ公開された。



宇波彰『デザインのエトス(人)と(物)のアイデンティティをめぐって』(大村書店、一九九八)

ポストモダン以降のデザインの現れる、人と物との関係の変容をテーマにしているが、事態は現在では大きく変化してしまっており、時代の変化によって批評言葉の条件も失われてしまうことをこの本自らが体現しているかに見える。プラステティック論などは示唆に富んでいる。